

トライアル・アンド・エラー
Trial & Error

No.47



旧ノンチャン難民村にて

タイ・カンボジア国境報告	2
難民村からカオイダンへ	7
SHAREの目指すもの	10
A. G. さんからの投稿	12

タイ・カンボジア国境報告

—6年目の現場から—

金子一弘 (JVC難民部門担当)



難民村からレッド・ヒル、そしてカオイダン・キャンプに移動する。(©バンコク・ポスト)

再開された乾季功勢

再びアラン^{*1}の街が騒然としている。昨年11月18日、ノンチャン難民村に対する砲撃に始まったベトナム軍による乾季攻勢^{*2}は、いまなお続いている。

2月13日、最後に残っていたノンブルー難民村が砲撃され約3万5千人がタイ領内へ流れ出たことにより、約800kmにおよぶタイ・カンボジア国境に点在していたすべての難民村のカンボジア人、約24万人は、タイ領内に避難するという結果をもたらした。(地図参照) 国際機関^{*3}(WFP/UNBRO, ICRC)及び民間救援団体による緊急援助が速やかに実施され、水、食糧が、カンボジア人の手に届いているため避難地^{*4}における混乱は現在のところ報告されていない。

このタイ・カンボジア国境において、JVCは現在、WFP/UNBROの傘下で2つのプロジェクト1) レントゲン移動診療、2) 補助給食を実施しているが、止むことのない砲撃により、昨年11月以降一時的なプロジェクトの縮小、ないしは中断を余儀なくされている。これは国境で活動するボランティア達の安全の確保という理由によるものであり、

国境でプロジェクトを実施している他の団体も同様である。

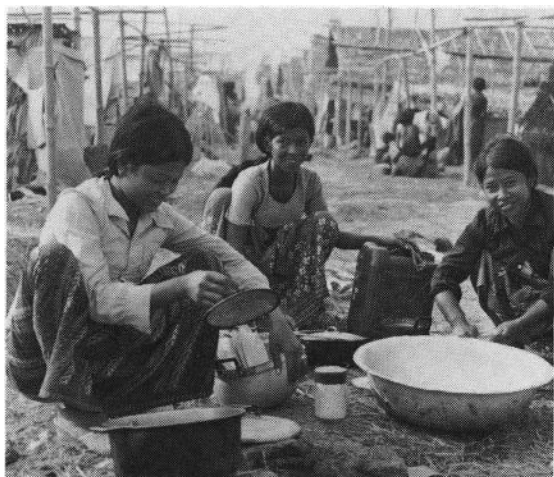
問われる救援活動のあり方

1979年、戦禍をのがれ大量に流出したカンボジア難民のニュースは、その悲惨さゆえに世界中を駆けめぐり、国際機関及び民間救援団体による緊急援助は迅速に開始された。JVCのバンコクにおける開設もこの時期と一致している。以来6年が過ぎ、何が変化したというのだろうか。カンボジア難民は、タイ領内に避難し、第三国へ定住することに将来を見出すのか、それとも、国境に留まることで祖国へ帰還する機会を持つのかという選択を迫られた。今回のベトナム軍の徹底した難民村への砲撃は、それらを焼きはらったという。生命の危険にさらされタイ領内に避難しているのは、後者の人々であるわけだ。もとよりタイ側からの救援活動が「カンボジア問題」を解決へと導くことはないのだが、長く救援活動に携わる者に共通しているのは、これらのカンボジア人達のおかれている現状に対する向うところのない激しい怒りだ。

JVC内部において従来より、国境のカンボジア人を対象とする救援活動の続行に関して否定的な意見がある。タイ側（外部）からの救援活動のあり方は、いまある状態を固定化させるものであり「カンボジア問題」の解決にとって不自然であるというのがその理由で、タイ・カンボジア国境からのJVCの撤退も考えられるというものである。確かに現在の難民村のカンボジア人は、三派連合政府の行政下であり、ベトナム軍との戦闘における兵站基地となっている一面はあるし、また、カンボジア国内の干ばつと洪水による慢性化した食糧不足のために、わずかばかりの援助を求めて国境へと逃れてくる人々も少なくはない。「問題」が長期化するが故に一定の「安定」した状態が生まれるに至った。例えば、難民村の行政組織の有効な働きにより、食糧がいきわたる、水の安定した供給が可能になった、病院や学校などがカンボジア人によって運営されている、などである。

6年経って……状況は何1つ変わらない

国境の難民村を訪れる人々に映る光景は、「平和」なカンボジアの村であるかもしれない。これらの事実をとって先の意見を正当化するものであるとするなら、援助のもたらした表面だけを見たとえでの判断であり不十分であると思う。それは、ベトナム軍の乾季攻勢により、タイ領内に緊急避難したカンボジア人の実際がよく示している。一見「安定」しているかに見えた難民村は、いま国境上のどこにも存在せず、消滅してしまった。生産手段を持たない彼らに食糧配給が中断されれば、たちどころに「飢え」が始まるのである。6年経ったものの、彼らの



バンブー・キャンプで食事のしたく

不安定な立場は変わっていない。限られた予算ではあったが、「最も必要としている人々へ、最も有効な援助」を目標としてきたJVCが、この状況から撤退していく理由など、どこにもないと思う。JVCは、組織として難民村のカンボジア人と5年をかけて、関わってきたことで、いま初めて一つの経験をしているのだ。日本から送られてくる救援物資を配給することから開始された国境の難民村での活動は、より重要である食糧＝補助食供給プロジェクト、医療＝移動レントゲン診療へと発展したし、言葉さえ不自由だったJVCのメンバーも、現在では、WFP/UNBROの傘下で救援活動を担う民間救援団体の一翼として活動している。いま必要なのは、この現況において救援活動の「限界」を語るのではなく、現時点で、何が最も必要とされているかという観点にたったプロジェクトの選択であり、また厳しい態度でプロジェクトの評価に望むことだ。タイ領内に緊急避難をしている24万人のカンボジア人に選択の余地などない。長期化するが故に、人間としての尊厳すら失われつつあるというのが現実だ。これらのことを広く知らしめていくのも、私達の重要な仕事の一つであるはずだ。

昨年以來、エチオピアへ向かったJVCの主なメンバーは、タイ/カンボジア国境で、半年から一年間の活動を経験している。新たな困難が彼らを待っているだろう。声援を送りたい。そして私自身は、これからもカンボジア人を友としてゆくであろうことを決意しようとしている。（3月8日、アランにて）

1 アラン - アランヤプラテート、バンコクの東約300kmに位置し、国際機関や民間救援団体の事務所があり、常時200人を越すボランティアやジャーナリストが存在している。

2 乾季攻勢一雨期があがる11月になると80年以降、毎年のように国境地帯で戦闘が繰り返されている。これは雨期の始まりと共に終息する。

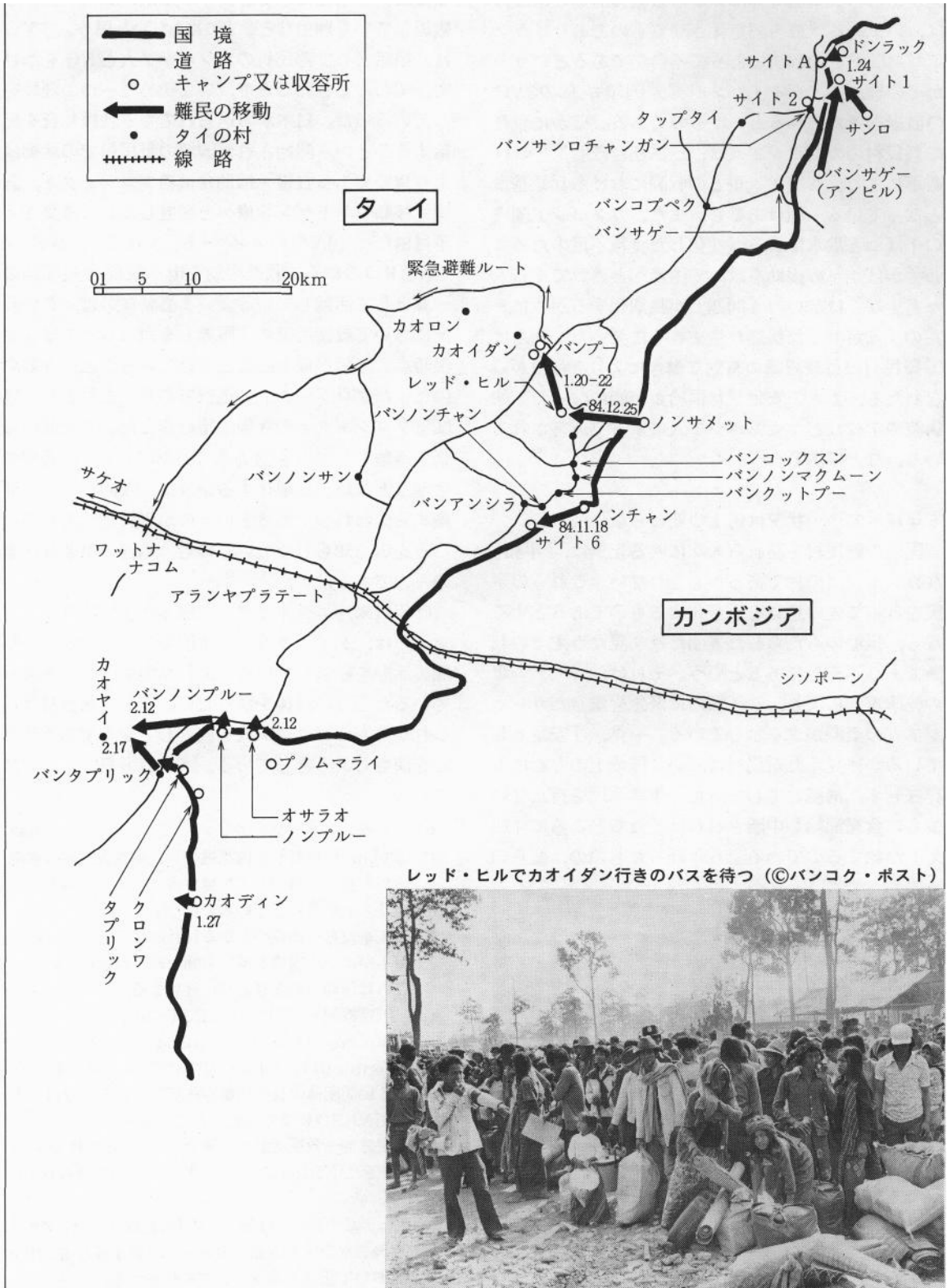
3 国際機関 - WFP/UNBRO (World Food Programme / United Nations Border Relief Operation) 1982年よりUNICEFに代り国境における民間団体の救援活動を統括している。食料、水はUNBROにより供給されている。

4 避難地 - 救援活動が、速やかに実施されるようWFP/UNBROによってあらかじめ設けられている。

5 三派連合政府 - 1982年6月に結成されたシアヌーク派、ソン・サン派、ポル・ポト派よりなる。国連において正式にカンボジアを代表する。

タイ・カンボジア国境の難民村

(1985年1月31日現在)



セウンの赤ちゃんに健康がもどった

- 練乳による授乳の悪影響 -



1
カヌエンニット・ソーンマクラ

オバイジョン（サイト6）に母と子供4人の5人家族が住んでいました。母親の名はセウンと言いました。夫がないので、家族のために彼女自身が働いてお金を稼がなければなりませんでした。一番末の子供は生後4カ月でしたが、母乳を飲んだ期間はたった1カ月にすぎません。これは、母親が仕事に忙し過ぎたため、年長の子供に世話を任せ、練乳を与えていたからでした。赤ちゃんはとてもしやせていて、頻繁に下痢をしました。そして練乳のみで離乳食は一切与えられていませんでした。

ある日母親は、彼女の友人のスリーが、丸々とした健康そうな赤ちゃんを抱いているのに出会いました。セウンは自分のやせた赤ちゃんと比べてみて、悲しくなっていました。彼女は友人に、どうしたら自分の子を彼女の子のように健康に育てられるのか尋ねてみました。スリーは赤ちゃんを母乳で育てており、そして4カ月頃から重湯の

離乳食を徐々にやり始めるつもりだと言いました。また彼女は、彼女の赤ちゃんが一度もお腹をこわしたことがなく、病気にもかかりにくいとつけ足しました。母乳は清潔で、いつでも飲ませられるし、お金もかかりません。母乳を与えている時が、母親の温かさや愛情を赤ちゃんに伝える絶好の機会なのです。他の母親同様、セウンも自分の子供を愛していたので、もう一度健康にしてやりたいと思ったのですが、問題が一つありました。母乳による授乳を長いこと止めてしまっていたので、母乳がもう出ないのです。

一週間後にセウンは、偶然市場でJVCの教師のパーラーに会いました。彼女はこの問題について相談してみると、母乳による授乳を再開するのに、決して遅いことはないと言われました。母乳は非常に有益だし、再生することもできるからです。病気から身体を守る働きもします。教師のパーラーは母親に、緑黄野菜や米、魚や牛肉、豚肉、大豆製品をスープで調理したもの、豆乳や湯ざましのような栄養価の高い流動食を沢山食べるように忠告しました。これらの流動食は母乳の生産を助けます。その上、彼女は赤ちゃんに頻繁に、そして定期的に母乳を吸わせなければなりません。そして現在、セウンの赤ちゃんは、離乳食の野菜入の米かゆを徐々に慣れるようにすすめる月齢に達していますが、調理する時に、清潔に留意しなければなりません。

セウンはそうするよう心掛けました。一番上の子供が仕事を肩代りしてやれる年齢になったので、彼女は前より自由な時間ができました。その頃から、セウンの赤ちゃんは日増しに健康になり、下痢の回数も減りました。彼女はとても幸福でした。

（11985年1月からノンチャン難民村における補助給食プログラムに参加しているタイ人スタッフ。助産婦。通称ニットさん）



（文中とは関係ありません）

カオイダンおよびバンブー・キャンプ全図

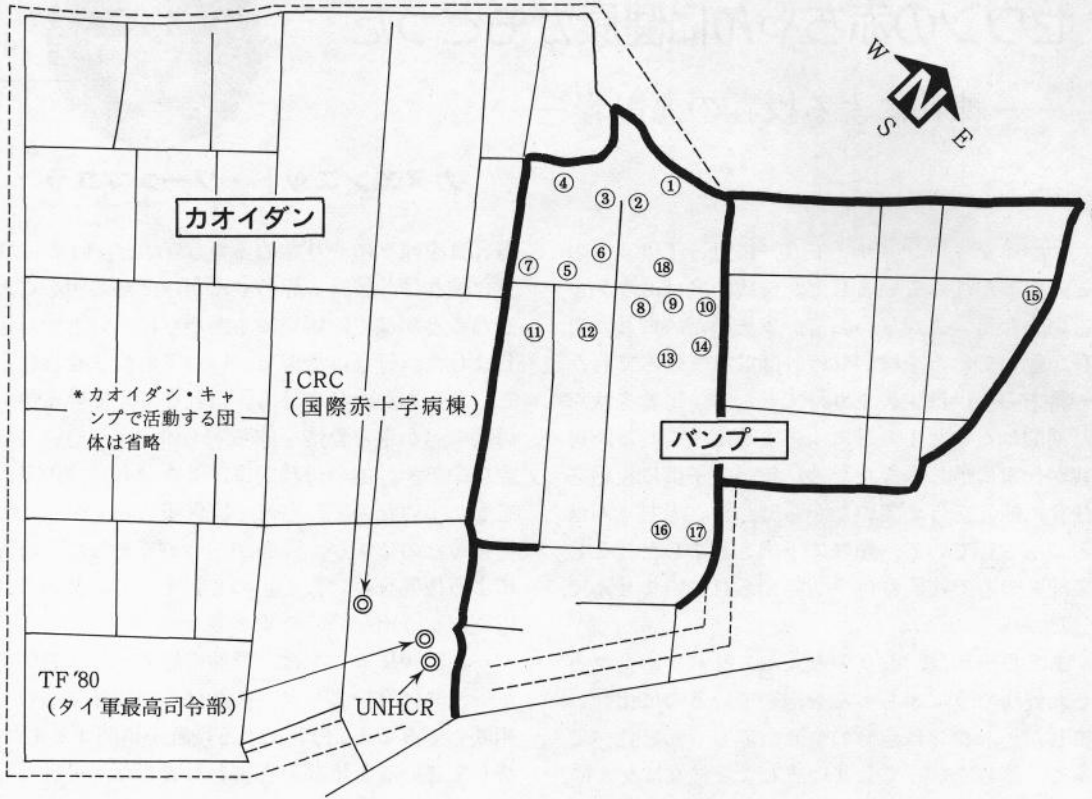
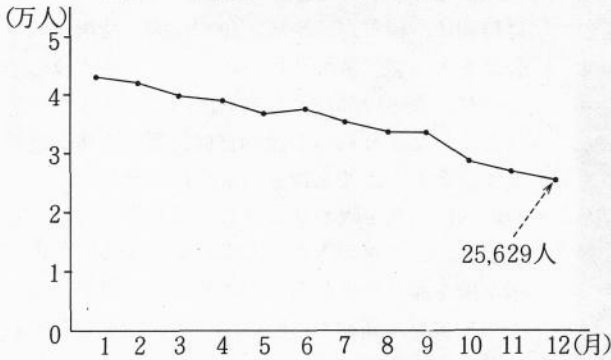


表1. 84年度の人口の推移 (カオイダン)



※バンブー地区で活動する団体

- ① CARE 補助給食センター
- ② JVC X線移動診療
- ③ ARC 病棟
- ④ YWAM 石けん学校
- ⑤ ARC 結核病棟
- ⑥ " 病棟
- ⑦ COR 歯科病棟
- ⑧ クメール婦人協会
- ⑨ タイ赤十字
- ⑩ ARC 外来病棟 3
- ⑪, ⑫ OHI
- ⑬ CONCERN 衛生
- ⑭ ARC MCH
- ⑮ 外来病棟 2 / MCH
- ⑯ JVC 補助給食調理場
- ⑰ COEER "
- ⑱ クメール・アドミニストレーション

表2. 年齢、性別別の人口(85年1月31日現在, カオイダン)

0		50		100%	
男性	女性	男性	女性	男性	女性
6,677人	6,223人	5,715人	6,307人		
12,900人		12,022人			
15才未満		15才以上			

難民村からカオイダンへ

— タイ・カンボジア国境の近況 —

永井 聖子
(KIDコーディネーター)

■新しい流入者

「カオイダン・キャンプ (Khao-I-Dang Holding Center) に、国境の難民が移されてくるらしい」この情報を得たのは、運悪くバンコクでのことであった。この時点では、まだカオイダンに、いつ、どのように移されてくるのか皆目見当がつかなかった。たんに噂なのではないかとも疑ってみた。

カオイダンは、1979年11月に開設されて以来、タイ軍最高司令部 (Supreme Command) と国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) の管轄下にある。收容されているカンボジア難民は、基本的には UNHCR から与えられる KD ナンバーと同時にタイ軍から与えられる JOC ナンバーによって正式に難民としての認定をうける。そしてまた、食糧配給をうけられるファミリー・カード (Food Ration Card) を有する。これには家族1人1人の氏名、年齢、性別、出身地 (カンボジア国内)、生年月日等が家長を中心として細かに記載されている。この難民としての正式な認定が、比較的簡単にされていたのは、およそ82年の2月あるいは3月であったと聞く。この認定をうけた人が、第三国定住の対象者となるのである。

ところで、現在カオイダンに居住しているのは上記の他に2つのカテゴリーの人々がいる。

1つは、昨年1984年8月26日に、タイ軍によって人口調査され、ファミリー・カードを有した人々である。多分、UNHCR またはタイ軍が、正式な難民認定を行わなくなった82年4月以降に国境の難民村からカオイダンに逃げて来たのだろうが、その数約4,000人である。彼らは持って来た金や、キャンプ内の自分の知人、親せき、家族などから食糧をわけてもらいながら生活していた。

さて、2つめは、前述の人口調査と関連して8月27日以降に国境から逃げて来た人々である。彼らの多くは、昨年の11月中旬頃からの戦闘を機に出てきている。私たちはこれらの人々をニューアライバル (新来者) またはイリーガル (不法入国者) と呼び、その数を5,000人とも10,000人とも聞く。彼らはなにしろイリーガルであるので、カオイダンの公式人口に含まれていない。

■JVCテクニカルスクールの引越し

1月15日、UNHCR から次の連絡をうけた。ノンサメットからレッドヒルに避難していた約60,000人の難民をカオイダンキャンプを2つに分けて收容する。現在カオイダンの東西に横断するプノンペン通りに沿ってその北側にレッドヒルからの難民を、南側にこれまでどおりカオイダンの人々を收容する。北側は、バンプー (Bam Puu) と名づけ、WFP/UNBRO*1の管轄下にする。

テクニカルスクールは、バンプー・キャンプに位置しているため、JVCの他にも幾つかの団体がカオイダン側に移動しなければならなかった。テクニカルスクールは6つのコースを有し、800人を超える難民が毎日働きながら勉強しており、3か月コースがあと10日から15日で終了しようとしていたところであったので、この引越は痛手だった。突然の移動であるから、もちろん新しい校舎が用意されているわけでもない。2日間、汗にまみれて、机、椅子、戸棚、資料、教材 (エンジン、オートバイ、工具等)、を他の団体の倉庫に運びこんだ。

テクニカルスクールは81年に活動を開始し、83年はじめには、IRC*2 (International Rescue Committee) の自動車整備学校と合併し、その規模を拡張してきた。'85年を迎えるにあたっては、難民のスタッフを中心に自主運営できるようにと、彼らの自治組織を作ってきただけに、学校運営ができなくなってしまったことは非常に痛手であった。現在新しい校舎を待ちながら、教師養成を行っている。

■テクニカルスクールの意義

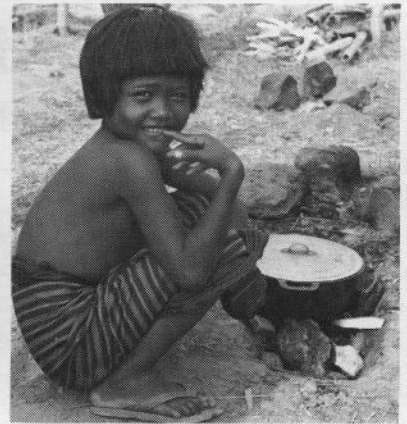
カオイダンで生活している難民にとって毎日の生活はある意味で単調である。キャンプから外に出ることは禁じられており、最低限の食糧、衣料はUNHCRによって支給される。また、彼らが、生産活動、経済活動を自主的にすることは基本的に禁じられている。元農民であった人々がほとんどだから、毎日汗を流して働いていた人々にとってはカオイダンでの生活は、非常に大きな変化であった。

*1 P3 参照

*2 緊急援助、第三国定住の援助を行っている。



大急ぎで家が建てられる—バンブー・キャンプ



早く煮えないかな。

ろう。JVCのような民間の救援団体は、現在合計14あるが、医療、公衆衛生、水、補助給食、建設、教育、技術訓練、福祉の分野で活動を行っている。難民の人々はこれらのサービスをうけるとともにワーカーとしても参加しているが、これは全体人口の約20%にしかならない。

テクニカルスクールでは、まず、1人でも多くの人に就職の機会を与えることを念頭においている。更に進んで、やはり将来の自立の為に役立つように技術訓練を行っている。現在彼らにとってUNHCRの方針で自国に帰還する（Voluntary Repatriation）か、第三国定住かこの2つの道しかない。カンボジア難民にとっては、このカオイダンが唯一の定住の機会を与えられる場所であるから、国境から必死で逃げてくる人々があとを絶たないのである。

また、新入生を迎えるにあたっては次のカテゴリーの人々を優先して受け入れてきた。

- ①心身障害を持っている人、またはその家族。
- ②家長を女性とする家族。
- ③保護者に伴われない年少者、または高齢者。

現在では、15才以上で、クメール語の読み書きができる者である人ならば誰でも入学できるが、他団体（OHI^{*1} Redd Barna^{*2}）と連絡をとりあい、JVCのテクニカルスクールの存在を上記の人々に知らせるように努めている。

JVCで教えているのは、基礎知識である。これは、タイ政府（軍）の方針で一つのコースにつき3カ月という制約があるためである。だから、自国に戻った時は、有効であるといえるのだが、第三国に定住した時、通用するかどうか疑問が残る。テクニカルスクールを卒業し、教師として働いてくれた数人からの便りによると、「第三国では技術を持っていれば仕事を見つけやすい。もし、何も技術がなけ

れば一時間\$ 3.5のトイレ掃除しかできない」という。ごくまれに\$20もらっている人もいるのだからこの差は大きい。テクニカルスクールで学んだことが、第三国での就業にどの程度役立っているかを探っていくことが今後の私達の課題である。

■テクニカルスクールの抱える問題と今後のめざす方向

4年目を迎えるにあたって私たちは、学校運営の責任をクメール人の手に渡していこうという目標を定めた。基本的な知識に限っていることもあり、授業はもうほとんどクメール人によって行なわれている。改めて自主運営というのは、このプロジェクトに対するクメール人の自主的な姿勢を作っていこうとするところからきている。緊急事態がない今、私たちの行う援助の有り方も“与える”プロジェクトから、対象者が自ら“作りだす”プロジェクトへ転換してゆくべきではないだろうか。カオイダンの人々は、日常生活は“与えられる”ことで支えられている。この生活の中で、精神的にスポイルされてしまったように見える。

カンボジアでは、作物が育ってゆく楽しみ、実りが多ければその喜び、そんな中に彼らの日常生活もあっただろう。それは言い換えれば、“生産する”楽しみ、喜びではないだろうか。学校で、学んだり教えたりすることで、何かを作りあげるといふ喜びを見出し、生きることへの積極的な姿勢をもう一度取り戻してもらいたいと思うのである。

私達はこの計画の為に自主運営組織を作った。彼らに学校が彼らのものであることを具体的に示す第

*1 障害者を対象に義肢作成。

リハビリを行っているフランスのNGO。

*2 アジア・アフリカを中心にして緊急援助、児童福祉などの活動をしている。

一步である。しかし、これの円滑な運営は非常に難しい。それは、どの組織にも見られるような問題、人間関係から生じてくるのが大きい。基本的なルール、例えば“時間を守ること”、“物を盗らないこと”などを守らない先生が多いことである。また、学校に来て働くことが、収入を得る為だけであると考える先生が多いことも目的を共有しきれない原因である。

そういう考えの先生達は、スーパーバイザー（テクニカルスクールの責任者）などによく言うそうだ。「自分も難民、おまえも難民なのに何故おまえに命令されなければならないのか。」

スーパーバイザーは、先生の会議でいう。「私は、何も命令して皆を思う通りに動かしたくて、様々の注意や指示をしりするわけではない。私は、プノンペンで自動車整備工場を経営していた。だから、皆より知識と経験があると思う。この私のもっているすべてを教えて、私と同じクメール人であるあなたたちがすこしでも良くなって欲しいと思う。あなたたちも大人だから理解できるだろう。」

スーパーバイザーと他の協力しない先生達に具体的な意見のくい違いがあるとは思えない。相性の問題であるのか、あるクメール人がいうようにポルポト時代に持ってしまったというリーダーに対する不信感であるのか、いずれにしても今後の活動の中で解決してゆかねばならない課題である。

■バンプー・キャンプ

ノンサメット・キャンプから、レッドヒルに避難してきた約60,000の人々の移動が始まったのは、1月20日の午前10時ごろからであった。大型バス、トラックを使ってのこの移動はその後3日間にわたって続けられた。約60,000人ということもあってか、活気がカオイダンで感じられるのとは全く違う。約60,000人は、クメール・アドミニストレーション（行政組織のようなもの）を中心に動いている。国境上にある難民村は、すべてこのアドミニストレーションをもっているが、特にこのノンサメットのものは

よく人々をコントロールしてきたそうである。

今回の移動は、レッド・ヒル近辺の治安の悪いこと、また、クメール人と近辺に住むタイの人々との商売を禁ずるために2、3カ月一時的な移動であると聞いているが、27日に国連事務総長がカオイダン・キャンプ、国境の難民村を訪れたこととも無縁ではないだろう。

■難民救援の裏側で

カオイダン・キャンプとバンプー・キャンプの違いというのはなんととっても、難民としての認定をUNHCR並びにタイの最高軍指令部から受けている人か、否かであろう。カオイダンに3種のカテゴリーの難民が収容されていると先に述べたが、結局非合法にいる人々というのは、バンプー等の難民村に住んでいる（収容されている）人々がカオイダンへ来た場合を言う。

彼らが第三国にいけるチャンスはまずないが、国境における戦闘の中での暮しに耐えられず出てくるのである。

2月17日、カオイダンで約500人のタイ兵による非合法の難民の捜査があった。午前4時からの全くの抜き打ちのものであった。家一軒一軒をまわり、KDナンバーもしくはファミリー・カードナンバーの提示をさせ、持っていない者は捕えて午前中に約500人をドンラック難民村の避難地であるサイトAに送った。午後4時までの捜査で約1,000人が、バンプー・キャンプへ送られた。

日曜日とあってほとんどの団体は、カオイダンにきておらず、団体の建物の内部、ロッカーの中までが捜査の対象となった。この日、逃げようとして殺された者1名、水がめの中に隠れて暑さの為に死んだ者1名、また1週間後になって自分達で掘った地中の穴で死亡している3名が発見された。

彼らが、非合法であるという事実が、私達を無言にさせる。私たちが、タイ軍のそしてUNHCRの管轄下で活動していることもまたそうさせる。

カオイダンは、一つの社会となっている。富める難民、貧しい難民、第三国へ早く出てゆくもの、長く待たねばならぬもの、様々な人々が一緒に生活している。彼らが本来の生活に戻れることが今もなお最善だと思えてならない。

その意味で、JVCが今後、カンボジア国内でプロジェクトを持つことは、タイ国内の難民にとって大きな変化をもたらすのではないかと思われる。



医療における、国際連帯と地域共同体の確立を

SHARE(シェア、国際医療保健情報センター)の目指すもの

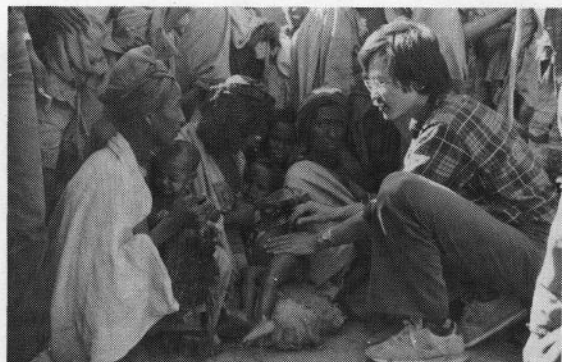
日産玉川病院医師 本田 徹

SHAREは83年の夏、第三世界での医療経験をもち数名の看護婦・医師などがJVCの東京事務所につどって、いわば自然発生的に誕生しました。

『Bon Partage』という機関誌を隔月に発行しながら、途上国の医療問題をテーマに月例会を催してきました。現在、学生を含め150名ほどの会員を数えます。JVCの星野事務局長の表現に従うと、SHAREはJVCのsister organization(姉妹組織)になるのですが、今のところJVCは私たちにとって大姉御または養い親で、その援助なしではやってゆけません。しかし将来的には、JVCと緊密な協力関係を保ちながらも、SHAREは一人立ちの方向へ行くと思います。

SHAREという名称は、Services for the Health in Asian and African Regions(アジア、アフリカ地域での健康サービス)の略で、「分かちあう」、「共にする」といった意味がこめられています。私たちの機関誌『Bon Partage』(公平な分配の意)のもととなったフランス語の動詞partagerも、英語のshareに相当する言葉です。SHAREという名で私たちは何よりも、第三世界の恵まれない人々への連帯(もしそういう言い方が不遜でないなら)の意志を示したいのですが、同時に私たちのグループの運動原則のようなものを反映させたいとも思いました。つまり、固い綱領で成員を金縛りにして忠誠を誓わせるといった、伝統的で、外に向けて閉じられた組織づくりの方法を蹴飛ばしてしまう。その代わりどんな未熟なものでもいい、各人が自前の問題意識や夢や思い入れをSHAREというmelting pot(るつぼ)に溶かし込んで、この「雑煮」の味を皆で共有してみる。そこから発展性や耐久力のある運動が生まれてくるかどうかはともかく、おたがいのチョコボな者同士、なんとかムシロ旗を立てて進むくらいの元気は湧いてきます。

さて、SHAREの現在の活動内容に触れておきましょう。前述の『Bon Partage』の発行、月例会の他、月一・二度運営委員会を開いております。運営委員会への参加も会員であれば自由です。現在最大の努力が注がれているのは、JVCの計画下に始め



られたエチオピア北部ウォロ州での飢餓民医療救援プロジェクトへの参加です。これは、SHAREが海外にメンバーを送る最初の機会となったもので、私たちの今後の成長のためにも、ぜひ成功させたいと念願しています。目下医師の林(達雄)兄、それに看護婦の石井(清美)さん、工藤(美美子)さんが現地入りしており、4月からは仲佐保医師も加わり、本格的な活動を展開できるようになるでしょう。

またSHARE代表の金田(衛)兄が先月末国際赤十字派遣の外科医として、タイのカオイダン・キャンプへ向け出発しました。彼は3~6カ月間、カンボジア難民を対象とした医療救援活動を行なう予定です。

国内での私たちの医療活動は、残念ながらまだ有機的なものとなっていません。これは今のところ夢物語にしか過ぎませんが、将来的には、私たちは農と医を統合しによる形での地域医療の現場を、日本のどこかに作りたいという希望もっています。医療を地域で住民とともに行なう「運動」と捉えたのは、佐久病院の若月俊一院長の独創的な視点でしたが、私たちは彼の方法に学びつつ、日本の内と外とを活発に往還するような運動体の形成を目差したいと思います。

最後に私たちの会へのご参加を、皆様に心から呼びかけたいと存じます。資格は特に問いません。むしろ看護婦や医師ばかりでは運動がだんだんやせ細ってしまいます。どうぞ広範な人々のお力ぞえをいただき、私たちのSHAREを名実ともに「共にする」に足だけの運動体に育ててゆきたいものです。

SHARE——これまでの活動記録(1983～1984.2)

●月例会（「」内は主題，名前は講師，敬称略）

- 第1回 「MSFの活動から学ぶ」 重光哲明（整形外科医 在パリ）
第2回 「ORTについて」 兵井伸行（順天堂大 公衆衛生）
第3回 「チュニジアでの活動」 本田 徹（青年海外協力隊OB 日産玉川病院内科医）
第4回 「途上国マラウィとタイ，マレーシアの難民医療活動」 石井清美（青年海外協力隊OB 中野総合病院看護婦）
「経済分析1. 東西問題」 金田 衛（日赤武蔵野外科医）
第5回 「レバノン現地報告」 泉 敦子（看護婦），ミズ・マリアン（オランダ人理学療法士）
第6回 「イングテレテッド・プロジェクトについて」 飯島愛子（家族計画国際協力財団），「JMT（カンボジア難民医療チーム）'82年～84年3回の参加から」 仲佐 保（国立医療センター外科医），「JVCソマリア・プロジェクトアフリカ難民入門」 田島 誠（JVCコーディネーター）以上1983年実施。
第7回 「ザイルでの7年間の活動」 徳永端子（聖母病院助産婦），「NGO活動の展望」 室 靖（東和大学教授 NGO研究者）
第8回 「熱帯医学入門」 田淵四郎（三菱造船診療所長『ある熱帯医の記録』の著者），「現地報告・戦火のレバノンの人々」 竹内俊之（JVCベイルート・コーディネーター）
第9回 「バングラ医療記」 宮崎 亮（キリスト教海外医療協力会），「アフリカ難民…15年間のアフリカ経験から」 兼川信夫（外務省診療所）
第10回 「検証 JMTの4年間」 無着とき（元JMT看護婦，『足，ください』の著者），碓 賢治（元JMTコーディネーター）
第11回 「日本の医学教育について考える — 専門医と一般医」 畑尾正彦（日赤武蔵野外科副部長，医学サロン）
第12回 「JVCの歩んできた道 — 欧米の民間救援団体から学ぶ」 星野昌子（JVC東京事務局長）
第13回 「現地報告 — モザンビーク最新情報」 金田 衛
第14回 「パリ大学熱帯医学コース」 重光哲明
第15回 「モザンビーク食糧援助活動について」 松村裕幸（WFP職員，在モザンビーク），「JVCソマリア — 自立農業プロジェクト」 税田芳三（JVCソマリア事務所長）
第16回 「フィリピン・パターン半島」 竹内敦子，「ロンドン大学熱帯医学コース」 工藤美美子（国立小児病院看護婦），「タイ=カンボジア国境，レントゲン移動診療プロジェクト」 金子一弘（JVCタイランド・コーディネーター），「同；補助給食プロジェクト」 荻野美智子（同）
第17回 「エチオピア医療調査報告(1)」 木内敦夫（城西病院医師 JVC/SHAREエチオピア調査団），「マラリアの基礎知識 — マヒドール大学熱帯医学コース」 金子 明（弘前大学，寄生虫学）
第18回 「エチオピア天然痘撲滅プロジェクト」 清水正高（青年海外協力隊OB），「途上国の結核対策について — タイ，バングラディッシュの経験から」 林 達雄（JVCタイ派遣医師，元国立横浜病院医師）以上1984年に実施
第19回 「'85年度SHARE活動方針，組織規約について」 仲佐 保，「エチオピア調査報告(2)；JVC/SHARE緊急医療救助プロジェクト概要」 星野昌子，「政府派遣第一次エチオピア医療班活動報告」 遠藤まゆみ（安田病院内科看護婦）

●スタディ・ツアー

第1回は，1984年8月18日，19日の両日，西那須アジア学院を訪問した。第2回は今年夏を予定。

●国際医療保健情報紙「BON PARTAGE」発行

ボン・パルタージュとはフランス語で「公平な分配」という意味。'83年8月の創刊号以来，隔月に発行，この2月が第9号になる（第4号が合併号）。

学習会，スタディ・ツアーなどの内容を紹介する一方，アフリカ緊急救援などの特集もしている。

●Medical English Class

「Where there is no doctor」をテキストにミズ・マリアン（オランダ人理学療法士）を講師にして実施。

●資料室（1984年6月開設）

国際機関，欧米民間団体，国内の医療機関の報告などを所収。

〔会費・募金の送金方法〕

口座番号 東京0—132730 加入者名 国際医療保健情報センター（SHARE）

85年度会費 一般 一口3,000円，学生 一口2,000円。その他資料室募金，エチオピア募金も同口座で受けつけています。備考欄に会費または募金の種別をご明記下さい。また通信欄に住所・氏名・勤務先（学校名）をお忘れなく。

月例会などについてのお問合せは，JVC東京事務所（TEL 03—316—3253）へお気軽にどうぞ。

会員一人ひとりの活動でJVCの体質強化を

——私がJVCに感じた疑問と解決策

(投稿) A.G. さん

行動する団体の行動しない会員

どちらかと言えば、偶然に近いきっかけで始まった、ささやかな私とJVCとの関わりも、ようやく、1年あまりになる。

この間、“アフリカ飢餓難民ブーム”が生じた。インドシナ以来、着実に活動を積み上げてきたJVCも、アフリカで活動している唯一の団体として、唐突に近い脚光を浴びた。新聞、雑誌、テレビなどで繰り返し紹介され、朝日新聞の厚生文化事業団から寄付金を受けた。なにも自らの価値観をマスコミに委託するわけではないが、報道のたびに、JVCを選んだ眼に狂いはなかったと、秘かにはれがましい思いをしたものである。

しかし、これでいいのであろうか、という感情も消えないのである。私がJVCを“選んだ”大きな理由のひとつは、日本人が現場に行っている団体、ただ金を集めたり寄付するのではなく自ら汗にまみれる団体、ということであった。私にも、ボランティアとして、なしうることもあるのではないか…。

それにもかかわらず、ここ1年あまり、私がしてきたことは、赤い羽根を買うことと、ほぼ同質のことであった。ときおり、T/Eの制作を手伝ってきたが、私のJVC事務所への訪問は、つねに“お客さん”として迎えられる。T/Eの責任者の下蘭氏が海外視察に出たおり、他の協力者ともども少し多めに関わった号には、“貴重なボランティアの協力”と編集後記で感謝される始末である。

私はボランティア団体であるJVCに入会したのではなかったのか？ 専従、随時の差はあっても“志”を同じにする仲間ではなかったのか。人生の一時期をボランティア活動に従事することと同様に、人生を通じて少しずつ継続的に参加することも、意義あることではないのか。

そういえば、手伝ってきたT/Eにも、“同志”に行動をうながしたり、現場で苦しんでいる“仲間”の苦悩を共有しようという記事は、そう多くはなかったようだ。どちらかといえば、“お客さん”に対する報告に近いようなものが多いように思えた。

つまり、「活動者、専従者のJVCで、会員は単なる継続的な寄付者」という雰囲気、どこかあるよ

うに思える。実際に活動する現場と、それを維持する組織が重要なことは言うまでもない。しかし、会員一人ひとりの活動も大切なのではないだろうか。

何よりも、行動することが特長である団体の会員が、お金を払うだけの非行動者であり、しかも、それに対して、活動の中心部にいる人たちが、あまり働きかけをしないというのは、皮肉なことではないだろうか。

“会員軽視”はJVC設立の経緯から？

ある意味では、今書いたようなJVCの“体質”は設立の事情からみて、当然のことかもしれない。

JVCの設立は、続々と難民の到着するインドシナの現場であった。そのときの様子を、勝手に想像してみよう。志はあっても、資金の続かない若者たちが、継続しなければいけない、一人では続けられない、自分たちの活動を支援する組織はないか、と焦りにも似た気持ちで集まったのであろう。そして、あるものは現場に残り、あるものは資金を獲得するために後方を走り回り始めた。

現場には救援を求める人々と、援助の手を伸ばしたくとも資金不足で十分にはできない仲間がいる。そういった状況で、後方の任務についた人たちが、とりあえずお金集めに奔走するのは、当然のことである。

市民ボランティアは、多くの場合、善意は一時的であり、寄付額は少ない。そういった人たちを組織し、まとまった資金を集めるのは、非常に困難である。手っ取り早く、あるところから集めるほうが、数十倍も効率的であったろう。自分たちの集める資金に、難民と現場のボランティアの生活がかかっていたのである。……このような事情が、“国内活動軽視という体質”を作ったのであろう。

しかし、私はお金を出すだけでなく、何かしたいのである。させてほしいのである。私と同じような気持ちを、東京事務所に寄せられた地方の会員もあるという。なんとかできないであろうか。

といっても、執行部といわれる人々を責めているわけではない。JVCがボランティア団体である以上、やりたい人が、やりたいことを、自らの創意発案と

してやればいいのである。組織の方針に差し障らない範囲で。

これから書くことは、会員一人ひとりへの呼びかけである。やりたいと思う人は、名乗り出てほしいし、豊かな経験を持つ執行部の助言も要請したい。

一人でも始められる運動がたくさんある。

●会員を増やす運動

JVCには、政治や寄金団体におもねることなく、自らの良心に従って活動してほしい。そのためには、広範な支持者と「自由になる資金」が基本になる。

1年間に1人が1人、会員を増やす運動はどうだろうか。1人が1人増やせば、つまり毎年倍増していけば、10年で約千倍になる計算だ。年間1万円の「会員」がむずかしければ、3,000円の「T/E定期購読者」でもいいだろう。

●T/Eを図書館に置く運動

公立の図書館、学校の図書館…。私たちのまわりには、多くの図書館がある。難民問題とJVCを、一人でも多くの人に理解してもらうために、T/Eを置いてもらおう（すでに実行している人もあると聞く）。理想としては、その図書館の経費でT/Eを買ってもらうのがいい。それが不可能なら、最初はこちらで負担して、単に“置いてもらう”だけでも悪くない。あるいは自分が読み終わったT/Eを置くという手もある。

●現場帰りの人を困む会をやる

10人くらい集まって、現場から帰ってきた人を囲んで、苦労話をしながら酒を飲む会というのはどうだろう。5,000円の会費で経費は半分くらい、残りはJVCに寄付する。大きい会場で、手作りの食品でパーティをするのもいいだろう。顔と顔を見合わせると話すと、思いがけない感興があるはずだ。

もちろん、活動者のほうでそんなヒマはない、というかもしれないが、粗衣粗食には慣れた人たちだ。安ホテルや会員の自宅泊まりでも、地方へ出張してくれる人がいるかもしれない。講演会というオーソドックスな方法もあるけれど…。

●募金集めをする運動

本当は街頭募金が、いろいろな意味で「面白い」のだが、JVCではしない方針とか。その代わりに、最近募金箱を用意するという話もあるから、それを身近に置くこともできるだろう。

＊ ＊

ともかく、何でもいい。一步、お金だけでなく、

一步踏み出して行動してみることに価値がある。

行動することによって地球の未来に明るさを

なぜ、私が会員一人ひとりの活動にこだわるのか、JVCの問題から少し離れるが書いてみたい。

私は21世紀の世界に対して、かなり悲観的な見通しを持っている。核戦争と地球的規模での自然破壊。その最終的引き金を引くのは南北問題ではないか…。

この見通しの根拠は、犬養道子氏の『人間の大地』などに詳しいので、ここでは詳しくは触れない。ただ、JVCソマリアのメンバーたちの話し合いの場で出た話題をあげておきたい。

ソマリアに流入した難民にとって、土壌の砂漠化などは、問題にならない。ほんの少し残った灌木を次々に切り、まったく非効率的なたき方で、燃料にしている。そう語られていた（詳細はT/E43号）。

21世紀の地球を脅かす最大の問題は、南の貧困と、南北の貧富の差であろう。そういう認識にたつと、難民が現在おかれている状況の悲惨さには、胸打たれるものがあるが、3歳の子どもの父親としては、彼の人生の時間について、思いが至ってしまう。

JVCが取り組んでいる課題は、すべて南北問題に関わっている。もちろん、JVCの活動で問題が解決できるわけではないし、恒久的解決の方法を、現在世界の誰かが見つけているとは思えない。この問題の解決には、政治、経済、社会など様々な面での、上と下の両方から施策が必要であろう。

そして、今できることは、今必要とされていることは、私たち一人ひとりの心のなかに「平和の砦」を築くことであろう。その砦をより強固にし、一人でも多くの人に広げること、それが重要なことであると思う。

JVCの活動に加わることで、より深く知ることは、この点においても、意義深いことである。それゆえに、集めた寄付金の額と自分の払った努力のバランスを厳密にとる必要はない。ともかく自らが行動し他者に広げることが肝心である。行動することによって、私たち自身が変わっていき、地球の未来も変わっていくのである。

自分自身と、隣人と、人類の未来を信じるために行動しようではないか。

「戦争は人の心のなかで生まれるものであるから、人の心のなかに平和の砦を築かなければならない」

— ユネスコ宣言より —

編集部から。A. G. 氏には多少の誤解がありますが、あえて原文のまま掲載しました。これを契機に皆様の活発な意見が寄せられることを希望します。

JVCプロジェクト

1985年1月31日現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
タイ カオイダン (カンボジア 難民キャンプ)	<p>●西崎憲司記念技術学校 自転車、牛車、モーターバイク、自動車、水ポンプ、発電機の整備技術を習得する。12月現在、難民数は25,692人、生徒数687名。1月15日、カオイダンの半分をUNBRO管轄サイトとし、ノンサメット村から逃れた62,000人を収容する事がタイ政府より発表された。</p> <p>●防犯灯 12月一杯で、CORへ維持管理の移転を行なった。</p>	UNHCR レフュジーズ・インターナショナル 妙心寺派宗務所 花園会	トンディー・ソムカネ 永井聖子、稲垣三千穂 ソムヨッ・ラタナタム
タイ・カンボジア 国境 (カンボジア 難民村)	<p>●レントゲン移動診療 移動レントゲン車による、難民村及びタイ被災村の巡回レントゲン診療。ノンサメット村が12月24日、アンピルが1月6日に、ベトナム軍の攻撃によって陥落するなどして、この間待機となる。</p> <p>●補助給食 11月18日のノンチャン村の陥落後、エバキューエーションサイト6で病院給食とドライパック配給を開始した。サイト6の人口、22,262人。受益者の再確認を行ない、週1回、4,520人に対し、ドライパックを供給。1月10日からは、人形劇による栄養教育を始めた。</p>	WFP/UNBRO 日本青年会議所 関東地区、医療 部会、城西病院 西本願寺 結城青年会議所	金子一弘 サルミエント・ロドリゴ クリアクライ・ブティ ヤビブン スラ・プロムチャン
バナニコム (第三国定住待ち 難民一次収容施設)	<p>●日本語学校 日本定住希望者のための日本語教育及びオリエンテーション。生徒数、カンボジア人17名。</p>	天理教千葉	鈴木絵理子 ティアン・パントウ 浜崎妙子、落合正幸
タイ農村	<p>●給水 スリン県12カ村での共同井戸掘りと基礎的健康教育。被災村での給水活動が年度内で終わることもあり、ブリラム県の拠点になりうる農村を調査中。</p>	モラロジーMIRC NTV	佐藤正喜 ブンナム・チャルンプリトゥム カモン・ミンムアン
バンコク市内の スラム	<p>●スラム改善 奨学金援助：スラム児童のための学費援助。 図書館：児童、成人のための図書館。 建材提供：スラム立ち退き者への物資援助。 12月上旬、6区の図書館の解体と移動が行なわれ、現在12区の倉庫を借りて、臨時の図書室としている。</p>	モラロジーMIRC NTV, JOFIC 庭野平和財団 YMCA横浜 聖ヨゼフ老人ホーム	タウィチャイ・タームクナノン ヴァラナット・ドワンウドム 加藤哲也
タイ バンコク事務所	<p>涉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計総務、情報収集および広報、バザー等。 季刊「ニュース・レター」(英語・タイ語)発行 バンコクでの活動者会議及び本部での会議により、新しいバンコク事務所長を選任した。</p>		佐藤正喜(バンコク事務所 長)、本橋 栄、高塚政生 ボンピモン・チャイブーン 勝俣江美、佐藤和美 他約10名
エチオピア ウォロ州 (アフリカ)	<p>●緊急医療事業 11月、12月でウォロ州、チグレ州(北部)、ハラルゲ州(東部)、シダモ州(南部)での調査を終え、事業実施の段階に入った。星野事務局長はRRC(救援復興委員会)との団体受入れの契約を完了し、12月23日帰国。現在ウォロ州デシ市周辺での医療センター開設にあたる最終現地調査を行なった。</p>	朝日厚生文化事業団 (株)B・R・B ノートルダム修道院	林 達夫、石井清美 荻野美智子、江川 勝

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
ソマリア (マガネイ・キャンプ) (アフリカ)	●農業による自立促進 エチオピアからソマリアへ逃れて来た難民を対象にした、農業による自立促進プロジェクト。昨秋、初めての収穫があり、最近ではJVCに頼らず自分達の手で問題を解決しようという前向きの姿勢が難民の中に現われ始めた。また、昨年末よりUNHCRとの契約更新のための段階に入り、1985年度の事業計画を作成中である。当プロジェクトの成果が、難民にはもとより、ソマリア政府やUNHCRに高く評価され、農場面積規模の拡大を強く要請されている。一方、エチオピアからの新難民に対して、JVCでは一部の極めて衰弱した母子をJVC居住地内で緊急的に補助給食などを始め、本格的活動開始に向けて、タイからボランティア1名を派遣した。	UNHCR レフュジーズ・インターナショナル 朝日厚生文化事業団 仏国土の会 創価学会	税田芳三(ソマリア事務所長)、柴田久史、高橋一馬 掛村 均、野田浩平、 モハメッド・アデン・モハメッド、シャッド・モハメッド・ムーザル、 ラシッド・モハメッド・ランジャイル、サディック・モハメッド・アリ、 モハメッド・ハジ・ヌール その他12名のソマリア人 スタッフ 嶋 紀晶
モザンビーク (アフリカ)	●フード・フォ・ワーク活動への人材派遣と調査 WFP(世界食糧計画)が行っているフード・フォ・ワークへの協力を主目的とし、昨年11月10日より調査員を派遣。1月31日帰国。		内山田 康
日本国内	●日本語家庭教師 東京、埼玉、神奈川、千葉、山梨に定住している難民の家庭を訪問して日本語及び生活の指導。昨年10月より神奈川県大和市に開校した日本語教室は第1期を12月で終え、現在第2期に向けて準備中。インドシナ難民以外にも含め対象難民の数は216名。	禅林寺 UNHCR 中部善意銀行	森山久寿子 他約64名
	*バザー、ハンディクラフト販売 *カオイダン「国境を越えた人々」上映運動	浄土真宗本願寺派 高岡寺族青年会	関 田鶴子 他約20名 鶴田三芳他
東京事務所 (本部)	渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報等。 機関誌「トライアル・アンド・エラー」発行 JVC説明会～毎月第1月曜日 午後6時～9時 第3日曜日 午後1時～4時	全国社会福祉協議会	岩崎駿介(代表) 星野昌子(事務局長) 熊岡路矢、鶴田三芳 佐々木志保、下園宏司 他約15名
人材派遣プロジェクト			
シンガポール (ホーキンスロード・キャンプ)	●UNHCRーベトナム難民キャンプでの管理・運営	日本YMCA同盟 アジアキリスト教会議	ニール・リー

☆個人の方からの寄付につきましては、月ごとに集計を出し、裏表紙に掲載しております。個々の方のお名前は半年ごと一括してご報告いたしております。

☆人事変更のお知らせ (1985年1月14日より)

JVCタイランド事務所長 高塚政生 → 佐藤正喜
同所次長 本橋 栄

JVCの活動とその目的に御理解を

▶**JVCとは**— Japan International Volunteer Centerは1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金他によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行います。

▶**JVCの会員募集について**— 会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶**機関誌「Trial & Error」のみの購読について**

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶**送金の方法**— 下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名-JVC会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名-JVC東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい。)

▶みなさまの募金を支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- インドシナ難民救援募金**(1月小計 303,800円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- クロントイ・スラム募金**(1月小計 3,000円) バンコクのクロントイ・スラム内の図書館の運営およびスラム立退き者のための建築資材購入費に使われます。
- デッグ・スラム奨学金**(1月小計 67,000円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- アフリカ難民救援募金**(1月小計 1,203,876円) アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- レバノン被災民救援募金**(1月小計 2,000円)
- 日本語家庭教師募金**(1月小計 0円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- 医療募金**(1月小計 5,000円) 緊急事態が発生した場合、速やかに医師を派遣したり、医薬品などの緊急救援物資を輸送するために使われます。
- ボランティア募金**(1月小計 119,842円) 現場で活動を続けるボランティアの健康管理費にあてられます。
- JVC運営経費募金**(1月小計 23,700円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- 無指定募金**(1月小計 287,214円)

▶**送金の方法**— 下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
東京9-27495(募金種目名をご記入下さい。)
加入者名-JVC東京事務所

編集後記

▶この世の中で、大切なもの。愛、誠実さ、優しさ、信頼、理解、問題の共有、参加、自立(律)、調和、家族、友人、幸福、平和、誕生、創造、アイデンティティーの発見、自己理解、自然への慈しみ、寛容、水、食糧、住居、仁術の医、太陽、適正規模。この世の中で、嫌いなもの。憎悪、無理解、対立、孤立、殺りく、暴力、抑圧、差別、浪費、破壊、断絶、傲(おご)り、嘘、裏切り、利己主義、派手、虚栄、見下し、戦争、優越感、お恵み根性、お涙ちょうだい根性、縄張り根性、純血主義、全体主義、誇大広告、刹那(せつな)主義、人権・人命の軽視、調整のとれない規模の拡大。みんな、本当は分かっているはずなんだよね。

▶創刊以来、親しまれてきた「Trial & Error」のタイトルですが、日本語の「試行錯誤」と必ずしも一致しませんので、変えようと思います。何か素晴らしい名前は、ありませんか？編集部までお便り下さい。締切、5月末日まで。

▶3月から編集スタッフに加わった前川昌代です。どうぞよろしく。JVCとのかかわりは古いのですが、会費だけの会員の期間が長かったので、もう一度勉強のやりなおしをしています。東京近在の会員や専従者だけのJVCではありませんのでT/Eにご意見、ご希望をお寄せ下さい。

昭和60年2月20日発行(毎月20日発行)

編集人 下園 宏司

発行人 星野 昌子

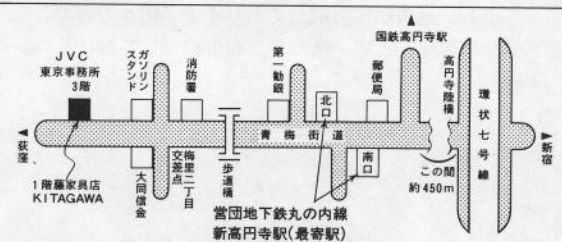
発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所
〒166 東京都杉並区阿佐谷南1-1-5 安田ビル3F
☎03(316)3253 Telex: 2323187 JVCHQ

バンコク事務所 JVC THAILAND
67 South Sathorn Road
Bangkok, THAILAND ☎(286) 4857

ソマリア事務所 JVC SOMALIA
c/o UNHCR P.O. Box 2925
Mogadish, SOMALIA
Telex: 794 HICOMREF SM

印刷所 ㈱ベスト・プリンティング

*本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。



定価 送料共 300円